GODEATER　～三爪炎痕の記録～

陸茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＯＤＥＡＴＥＲ　～三爪炎痕の記録～

【Ｎコード】
Ｎ７１８４Ｚ

【作者名】
陸茶

【あらすじ】
フェンリル極東支部に雨宮リンドウが入隊し2年がたった頃、そこではある「奇妙な噂」が流れていた。
それは「討伐対象に三筋の炎の爪痕が残され殺されている」という噂。
リンドウは噂の真相を確かめるべく調査に向い、そこで「三爪炎痕」と呼ばれる正体不明の生物に遭遇する。
これは「三爪炎痕」とリンドウ達アナグラメンバーの記録。
「三爪炎痕」は何者なのか？何を目的とし荒神を殺していたのか――

そしてリンドウ達と共に過ごし何を感じるのか……

用語

・荒神～アラガミ～

何でも補喰し補喰したものの性質を取り込む生物。

複数の細胞「オラクル」（細胞自体が１つの生命体）が集まった生物であり、神機以外の武器で殺すには、司令塔の役割を果たす「コア」と呼ばれる司令細胞群を取り出すか、破壊するかの二つの方法しかない。

銃弾に耐性をもったりするため討伐するには、荒神のコアをベースに造った武器「神機」が最も有効とされる。

・神機～ジンキ～

「神機（ジンキ）」とは対アラガミ用特殊兵器。

アラガミの身体を構成する「オラクル細胞」で構成されている。

神機を使うには、荒神の細胞を自らの体に取り込むしかない。

細胞に適応することに成功すれば、神機を使うことが出来る。

その上、身体能力、治癒力が飛躍的に上昇する。

適応出来ない場合、又は細胞を過剰投与した場合、荒神細胞に体を乗っ取られ、アラガミ化するか、死亡する。

神機のコアには人工的に作られた「アーティフィシャルＣＮＳ」をベースとして使用しており、それと後述の腕輪を接続することで使用が可能になる。

その強靭な細胞結合により通常兵器では倒せないアラガミを「喰い破る」という方法で大きなダメージを与えられる唯一の手段。

可変機能を持たない「旧型」と剣形態と銃形態とを自由に切り替えられる神機変形（フォームチェンジ）を備えた「新型」にわけられる。
どちらにも属さない解析不明の『特殊形状型』も存在が噂されている。
開発経緯、設計図、素材などが一切不明で存在自体が危ぶまれている神機。

ちなみに「新型」は現時点で開発されておらず作中に登場するのは旧型のみ。

ゴッドイーターの腕には「Ｐ５３アームドインプラント」という腕輪型のものがはめられる。
「腕輪」と呼ばれるものが嵌められており、これにより神機とゴッドイーターは一体となる。
また、範囲は限られるが通信機能も存在する。神機使いの生存反応もこれで確認される。

腕輪は死ぬまで外すことはできず、引退したゴッドイーターの腕輪には黄色のテープによる封印が施され神機は次の適合者に引き継がれる。
また戦死者の物も同じである。

以下　神機のパーツ構成。

・旧型　接近型……刀身、装甲、捕喰形態　のみ。
　　遠距離型…銃身のみ。

・新型　……刀身、銃、装甲、捕喰形態。

・特殊形状型……現時点では説明不可。存在のみが確認されてい

る。

・捕喰形態（プレデターフォーム）

剣形態から発動される特殊な形態。神機の使い手を「ゴッドイーター（神を喰らう者）」と呼称する由来。
発動すると刀身先端に、アラガミの頭部を象ったような物体が現れ、アラガミの身体の一部を「喰らい」その力を取り込む特殊な攻撃ができる。
捕喰が成功すると、ゴッドイーターは一定時間「神機解放」へと移行される。

刀身……三種

・バスター　攻撃範囲、威力は三種類中最高クラスの身の丈ほどもある刀身。
重量ゆえ移動スピード等は最も遅い
「チャージクラッシュ」という高威力の斬撃が可能

・ロング　ショートとバスターの中間
移動スピード攻撃スピードのバランスが良い
新型のみ「インパルスエッジ」とゆう射程の短い強力な砲撃が可能

・ショート　攻撃スピード、手数は三種類中最高クラス

重量は軽いが威力は三種類中最も低い
特殊な攻撃手段はないが、移動スピードは最も速い

銃……三種

・スナイパー　正確な狙撃が可能。
連射スピードは遅いが射程距離は三種類中最も長い
射撃時の反動が最も低い。

・アサルト　連射スピードは三種中最高クラス。
反動がそこそこ強く正確な射撃は困難
射程距離はスナイパーの３／２

・ブラスト　砲撃の威力は三種類中最高クラス
バレッドにもよるが一撃で高層ビルを砕く程の威力がある
高威力の反面、射程距離は最も短く反動は最も強力
連射と正確な射撃は不可能

装甲……三種

・タワーシールド　三種類中最も重くガード範囲が広い
展開速度は遅いが、バスターとセットで使用した時、展開速度が上昇

ミサイルすら軽く受け止める程に非常に強固な装甲

・シールド　タワーとバックラーの中間
展開速度もガード範囲も半端
戦車の主砲は軽く受け止める

・バックラー　三種類中最も軽くガード範囲が狭い
展開速度は最も速いが最もガード範囲が狭い
乗用車との正面衝突にギリギリ耐えられるぐらい

・神機解放（バーストモード）
捕喰に成功し、生きたアラガミの力を取り込んだゴッドイーターが、一時的に身体強化された形態。
移動速度・攻撃力・攻撃速度が上昇し、空中での2段ジャンプが可能となり、オラクルやスタミナの消費量が減少するとのこと。
発動中は神機から黒いオーラが噴き上がる。

用語（後書き）

前作より修正して投稿。

第0話　プロローグ（前書き）

フェンリル極東支部に雨宮リンドウが入隊し2年がたった頃、そこではある「奇妙な噂」が流れていた。
それは「討伐対象に三筋の炎の爪痕が残され殺されている」という噂。
リンドウは噂の真相を確かめるべく調査に向ったのだが……

第0話　プロローグ

２０６３年

―贖罪の街―

「ふう……」

荒れ果てた教会の中で、雨宮リンドウはタバコを口にくわえ火を付ける。

「しっかし……こりゃなんなんだ？」

目の前の死体に刻みつけられた特徴的な傷跡を見てリンドウは露骨に顔をしかめた。
そして頭をポリポリとかく仕草をしながら周囲に広がる惨場を見る。
リンドウの周囲に広がるのは生命活動を終え、すでに事切れた生き物たちの残骸と体液。

「最近はコレばっかじゃねぇか……
ま、コッチとしては仕事が減って楽なんだがなぁ」

リンドウはまた、ひとりごちを始めていた。
最近はこんな事ばかり起きている。
ミッションを受注し、現場に向かうと討伐対象は既に死んでいて現場、または討伐対象に特徴的な傷跡だけが残されている。

「お前さんは、見たのかい？『三爪炎痕（フレイムエッジ）』を」

リンドウはソレに向かって訊ねた。
だが、リンドウの瞳に映るソレは何の反応も示しはしなかった。
ただカッと見開いた瞳に、まるで鏡のようにリンドウを映しているだけ。
当たり前だ。
ソレはとうの昔に生命活動を終えていたのだから。
その死体（み）に三筋の炎の爪痕を刻まれて。

ソレを一言で表すとすれば、『異形』である。
虎といったか――そんなことは、まぁどうでもいい。
その虎とか言ったものを連想させるモノの体躯は非常に大きかった。
リンドウが子供に見えてしまうぐらいソレは大きい。
また、ソレには既存の生物にはない特徴的な個所がいくつか存在する。
例えば首の後ろから生えた幾枚の花弁にも見える、鮮血で染められた様な紅い体皮。

殆ど欠損はなく、まるでそれは百獣の王のみが身に着けることを許された外套（マント）。
そしてリンドウへと向けられる白く濁った不出来な曇りガラスの様な、御世辞にも決して綺麗とは言い難い瞳。
最強の野獣たる虎の様な頭部。
その頭の上半分は硬化し、鬣（たてがみ）にも鎧兜にも見えた。

ソレは数多の《アラガミ》の中でも特に強大な力を持つ、雷獣『ヴァジュラ』と呼ばれる存在。
まるで空想上の生物を再現したその異形（からだ）。
本来ならば決して存在してはいけないモノ。

だが、今はそのような異形で世界は満たされている。
正しい進化を遂げていたならばこのような異形（せいぶつ）は、決して生まれない。
正しい生態系からも決して誕生しない異形（せいぶつ）。

やがて、このような異形の生物――
生物と呼んでいいのかすらも怪しいモノたちは、かつて『日本』と呼ばれていた国に伝わる八百万（やおよろず）の神にたとえられるようになり、『アラガミ』と呼ばれるようになった――。

「答えられるワケ、ないよなぁ……雷獣さんよ？」

モノ言わぬ獣神から視線を戻し、二本目のタバコに火を付けようと

した瞬間――
リンドウの感覚が周囲に生まれた気配をとらえた。

「まいったね、こりゃ……ちぃーとばかしのんびりし過ぎたか？」

リンドウはタバコに火を付けるのを止め、懐にしまい立ち上がり、彼は壁に立てかけておいた己の武器を握りしめた。

ソレは一見すると巨大な鉄の塊にも見える。
だがよく見ると、ソレはリンドウの身の丈ほどもある巨大な剣だった。
鮮血に彩られたかの様な赤いチェーンソーの刀身を持つ巨大な剣をリンドウは軽々持ちあげる。
そして周囲に目を走らせた。

荒れ果てた教会のあちらこちらから気配の主、『アラガミ』達はソノ姿を現す。
般若の面とも、鬼のモノとも取れる奇怪な尾を振り上げ、その双眸に獰猛な狩人の目と同じ光を宿し、近づいてくるのは『オウガテイル』とよばれる『アラガミ』。
『オウガテイル』と言うアラガミは先程の獣神に比べその体は小さい。
単体の強さもそれほどではなく、新米のゴッドイーター達の初陣の相手にされることが多い。
だが、群れられるとそれなりの脅威となる。

「ちゃっちゃと『コア』を回収して帰りゃ良かったな……」

リンドウは雷獣をちらりと一瞥すると、肩を竦めアラガミ達に視線を戻す。
そして彼は八百万の神々に例えられた≪アラガミ≫を屠る事の出来る、唯一の剣

――『神機』

をその手に構えた。

『アラガミ』は非常に特異で厄介な性質を持つ。
その性質とは、ありとあらゆる物質を『捕喰』すること。
コンクリートや鉄などの無機物だろうが、動植物の様な有機物だろうが関係ない。
例え同じ種である『アラガミ』だろうと奴らは関係なく《捕喰》する。

そればかりか『アラガミ』は自らが捕喰した物体の情報を己(おの)が身に取り込み、その体を《変化》させる。
しかもそのスピードは恐ろしく早い。
世界が、動植物が、人間が長い年月をかけ行ってきた進化のスピードなんか比べ物にならない程に。
まさにそれは《アラガミ》と言うの名の通り、人智の及ぶことの無い《神》の領域に等しいモノ。

奴等がそんな性質を持っているからこそ、雷獣『ヴァジュラ』の様な《アラガミ》の中でも上位とされる力を持った《アラガミ》を、こいつ等なんかに喰らわせるわけにはいかない。
絶対に――。

オオカミの様に巨大な顎の奥から低い唸り声をあげ、『オウガテイル』の群れがリンドウを取り囲む。

「美人のお姉さん方に囲まれるのなら大歓迎なんだがな……」

構えた神機をダラリと下げて、ふと思う。
目の前にいるのが『アラガミ』とは言え、やはり軽口を叩ける方が調子が良いようだ。

リンドウはゆっくりと足を踏み出し、無造作ともとれる挙動でオウガテイルの間合いへと侵入していく。
オウガテイルの動きにも「迷い」といえそうなモノは見受けられなかった。
それはオウガテイルという一つ生命体の意志なのか、それとも本能か。
はたまたオウガテイルの身体を構築しているオラクル細胞一つ一つの意思なのか――

オウガテイルは自分の間合いに入ってきた哀れな獲物を捕食せんと、その巨体を支える両脚と悪鬼の様な尾に力をこめる。
両脚の筋肉はギリリリ……と、力を加えられ軋むバネの様な音が聞

こえそうな程に盛り上がってゆく。
そして、オウガテイルはその力を一気に開放し獲物(リンドウ)へと飛び掛かる。
リンドウの目の前に、大口を開けたオウガテイルが迫る。
下顎から突き出る鬼の角にも見て取れる双牙は、いとも容易く獲物(リンドウ)を貫き通し、その肢体を一切の容赦なく、誰のものと分からぬただの肉片へと変えてしまうのだろう。

「《アラガミ》様の熱いキッスはお断りさせてもらおうか……！！」

刹那、リンドウの右腕が跳ね上がり神機の刃(ブラッドサージは)がオウガテイルの首をとらえた。

「おおおぉぉぉぉぉっ！！」

一瞬、右腕の筋肉が膨れ上がる。
リンドウはオウガテイルの首筋に食い込んだブラッドサージの刃をねじ込む。
刃をねじ込まれたオウガテイルの首は切り飛ばされる。
首を失ったオウガテイルは鮮血を吹き出しながら地に伏した。

オウガテイル達は低いうなり声をあげながら後ずさり、リンドウから少しばかり距離を取る。
それらの発した唸り声は人間であれば警戒の声だったのかもしれない。
もっとも《アラガミ》に感情があるとは思えないが。

リンドウはその場を動かず、ブラッドサージを構える。
彼のその瞳は完全に狩人のソレだった。

「……！？」

突如異様で強大ななプレッシャーを感じリンドウはさらに感覚を研ぎ澄ませる。
オウガテイル達はというと、蜘蛛の子散らすようにして足早にその場から去って行った。

「この感じ……まさかと思うが、な」

リンドウは神器を構え、周囲を警戒しながらゆっくりと朽ちた教会を後にする。
そして彼はCエリアと呼ばれるこのエリアの中ではかなり開けた場所に来た。
彼はCエリアの中腹、教会へ入るもう一つの入口の所まで来ると壁に身を隠し「ふぅ」と息を吐きだした。
リンドウが気を引き締め直し再びその身を戦場へと投じた次の瞬間、プレッシャーの主はその姿を現した。

第0話　プロローグ（後書き）

読みづらいところがあったので訂正しました。
ＧＥの歴史上おかしいてんがあったので大幅改変。
今後はこんなことが起きないようにしっかりと確認します。

第1話　遭遇

その強大な威圧感(プレッシャー)を放つ主は、リンドウの真正面にある一際(ひときわ)巨大なビルの中央に空いた大穴から降り立った。

その姿を見たリンドウは、自身の身体が硬直するのを感じた。

（冗談だろ……？）

身体からドッと汗が噴き出すのをリンドウは感じた。

――ソレは神の様にも見て取れた。

その昔、空を支配していたという鷲を連想させる一対の巨大な翼の如き手腕。

二本の足で屹立し人間の様な腕を胸の前で組み、地を這う人間(ムシケラ)を睥睨する女型(メガタ)の武人。

その顔は獅子と人の合わさったかの様なもので、頭には古代エジプトの王族たちが被っていた鎧兜を連想させるものを被っていた。
その体は妖しくも艶やかな淡紫の光に包まれ、他のアラガミと一線を規す神々しさと禍々しさを放つ。

（資料でしか見た事はねぇが……間違いねぇ、コイツはヘラ！！）

そのアラガミはシユウ神種が共食いの末に生まれたと聞く。
内に秘めたる力は既存のシユウ種等とは比べモノにならないほど高く、鋼鉄の壁すら容易に破壊すると言う。
ヴァジュラをいとも容易く討ち果たしたといった噂話も耳にしたこともある。手腕のたった一振りで、だ。
だがそれもヘラの力のほんの一部に過ぎないのだろう。
もしも、ヘラがその気になればヴァジュラすらも一瞬で屠れるのではないだろうか？

そんな実力未知数のアラガミ、『ヘラ』を喰らうことのできる戦士（ゴッドイーター）はこの極東支部にも、いや世界中のどの支部にも居ないだろう。
彼はわかっていた。
これは、具現化された『絶望』と『死』であると。

「一体何をやってんだ、観測班の奴らは。
ヘラが居るなんて聞いてねーぞ……」

リンドウは身体を押しつぶされてしまいそうな程のプレッシャーに

耐えながらも、毒づいた。

観測班が日々アラガミの発する特有のパルス、《偏食場パルス》を観測しているのはこういった乱入者（イレギュラー）の登場を事前に知らせ、最悪の事態を回避するためである。

だと言うのに、乱入者（イレギュラー）の登場。

それも通常種よりも遥かに強い力を持った第二禁忌指定種の登場という、最悪の事態は起きた。

これは、帰ったらビールやタバコの2、30本はもらわなければ気が済まい。

もっとも、生還することができたならば、の話であるのだが。

「観測班のやつら……帰ったら覚えとけよ」

リンドウは恐怖に震える身体をどうにかして動かし、壁に背を付けたままゆっくりと顔をのぞかせる。

幸いなことにヘラはリンドウに気づいてはいないようだった。

ヘラはビルの麓（ふもと）にある高台に立ち、周囲をキョロキョロと見渡すだけでそこから一歩も動く気配が感じられなかった。

（アイツ……何か様子がおかしいな）

リンドウは落ち着きを取り戻したことでヘラの様子がおかしい事に気が付いた。

その体は、よくよく見るとリンドウが資料で見た姿と大分違う。
鷲の翼を思わせる一対の手翼の一方は半ばから切断され、もう一方の手翼も下の部分の所々が鋭利な刃物で切り取られたかのように欠けている。
さらに下半身の模様に見えた幾本もの筋は、模様ではなく欠けた脚部に走る亀裂。
頭部の威厳ある兜も無残に叩き割られ、生物のソレとはまた違う異質な断面（きずぐち）を覗かせていた。

――満身創痍。

と、いう言葉が一番ふさわしいのではないのだろうか？
リンドウがそう思う程にヘラはボロボロだった。
ヘラは高台から降り歩き始める。
ただ、そこには普段の狩人の様な堂々とした態度は見られず、何かに怯え数歩歩くたびに立ち止り周囲を確認する。
その姿はまるで天敵から逃げる小動物のそれといっていい。

（何から逃げてるってんだ……？）

相変わらずリンドウは顔だけを覗かせてヘラを観察していた。
前述の通り、ヘラの行動は明らかにおかしい。
明らかなのは『何かから逃げている』ということ。

ヘラはアラガミの中でも最上位とされるほどの力を持っている。
そんな存在が何かに追われているというのは、にわかに信じがたい話である。

（あれほどのアラガミを、あそこまで追い詰められるヤツなんか俺はしらねぇしなぁ……）

少なくともヘラを追う正体不明の「何か」にはヘラを凌駕する程の力がある。そんな力を持つ存在をリンドウは知らなかった。

（ただのアラガミなんか歯が立たねぇだろうしなぁ……て、なるとスサノオとかか？）

リンドウがそんなことを考え始めた瞬間に彼は、ヘラなど比べ物にならない程のプレッシャーを感じた。

（次から次へと……今日はなんなんだ！？）

リンドウの身体が、生存本能が彼に『逃げろ』と警鐘を鳴らす。
それでも彼は動かなかった。
否。彼は――リンドウはヘラを観察していた時の姿勢そのままに動けなかったのである。
ヘラはというと、自身が出てきたビルの大穴へと向き直り臨戦態勢を取っていた。

ヘラの出てきたビルの大穴から『ナニカ』が落下した、と思った瞬

間。
偽りの神、ヘラはその生涯に幕をおろしていた。

その身に、『三爪の炎の爪痕』を刻まれて――。

直後、ヘラの身体に刻まれた傷跡から、間欠泉の如く紫炎が噴き出す。
だが紫炎はすぐに治まり、吹きけされる蝋燭の燈火のようにして消えた。

リンドウは驚きを隠せなかった。
むしろ、驚きを隠せ、という方が無理だろう。
手負いと言えど相手は腐ってもアラガミ。

ソレを一撃の下に屠ったのは紛れもない、自分と同じ人間。
それもまだ齢（よわい）１５、６程にしか見えぬ、顔にやや幼さの残る少女。
服の隙間から覗く白雪の様な柔肌。艶やかで流れるような黒い髪。
吸い込まれてしまいそうな程に美しく透き通ったアクアブルーの瞳。
そんな少女がヘラの生涯に幕を下し、死を与えた。

「お前、何モンだ？
……まさか、嬢ちゃんが『三爪炎痕（フレイムエッジ）』なのか？」

リンドウはは耐え難い恐怖心を抑え平常を装って訪ねた。
少女は振り向かないどころか返事もしない。

「無視か……冷たいな、嬢ちゃんは」

二度目にして少女はリンドウに向き直った。

（……っ！？）

直後リンドウはその場から飛び退き、少女から距離を取っていた。
別に少女の顔が鬼の様だった、とかそんな理由ではなく。
人は余程の事が無い限り、距離を取ったりはしない。
リンドウが飛び退いた理由、ソレは目の前の少女にただ“睨まれた“だけ。

人類の天敵、絶対の捕食者、アラガミに囲まれても決して逃げ出さなかったリンドウは今すぐにでも逃げ出したかった。

目の前にいるただの“少女“から――。

無意識、いや防衛本能で神機を構えるリンドウを見て、少女はその口を開き問う。

「貴男は、敵か？」

「……は？」

リンドウはこの場にそぐわぬ、間の抜けた声を出していた。
少女はしっかりとリンドウを見据えたまま、再度問いかける。

「貴男は私の敵なのか、と聞いた。敵か味方か、どっちだ」

「敵じゃない」

「そう」

少女は短くつぶやくと、ヘラの死体をそのままにリンドウに背を向け歩き始める。
その時にはもう、少女からは微塵もプレッシャーを感じられなかった。

ピピピピ……

リンドウの胸ポケットで小さく鳴り響いた電子音を少女は聞き逃さず、少女は歩みを止めリンドウへと向き直る。

「その音、何？」

「ん？電子端末の着信音さ」

「でんしたんまつ……？」

「電子端末を知らないのか、嬢ちゃん？
簡単に言えば、電話みたいなものか」

「……でんわ？」

少女は小首を傾げ考え始めてしまった。

反応を見る限り、少女は本当に知らないようだ。
外部居住区の人間でも電子端末や電話ぐらい知っている。
なのにこの少女は知らない。
つまるところ、外部居住区出身ではないということになる。

（やっぱり、この少女があの『三爪炎痕（フレイムエッジ）』なのかねぇ）

第2話　少女の正体

「……ねぇ」

「なんだい？嬢ちゃん」

「貴男の持ってるそれは、何？
見た目は武器だけど、生き物の気配を感じる」

少女は感情の籠っていない機械の様に、右腕をあげリンドウの神機を指さし聞く。
その瞳からは、僅かにだが警戒の色が見えた。

「コイツか？コイツは『神機』ってやつだ。
……神機は知ってるよな？」

リンドウは少女に、当たり前のことを確かめる様な軽い口調で聞いた。

少女の返事は――

無言。

普通この反応は肯定の意を表すものである。

……が、少女の場合は違った。

黙り込み何か考えている表情を見せている。

これはこの世界の人間なら誰でも知っている神機を、彼女は知らないと言うことを表す。

「……冗談、ってわけじゃなさそうだな」

リンドウは頭をポリポリとかく仕草をしながら目の前の少女を見る。

その時、再び電子端末が音を響かせた。

訝しみながら電子端末を取り出し、ディスプレイに表示された回線番号をみて彼は眉を細めた。

表示された回線番号。それはフェンリル極東支部技術開発統括責任者「ペイラー・榊」の回線番号だった。

リンドウは考えごとに耽る少女に背を向け電子端末を耳に当てる。

「……はい、雨宮」

『リンドウ君！！無事かい！？』

耳に当てた電子端末から聞こえたのは、耳をふさぎたくなるほどの

大声。
回線越しに聞こえた大声の主、榊の声には焦りが感じられた。
それも尋常ではないほどの。

「……無事ですが、どうしたんですか？そんなに慌てて」

『慌てないわけないだろう！？
実はね、君の近くに「三爪炎痕（フレイムエッジ）」の反応がみられた！！
見つかってないなら急いでアナグラに帰投するんだ！』

榊はまるでマシンガンの様な速度で言葉を吐いた後、リンドウの返事など聞かずに回線を切ってしまった。

「三爪炎痕（フレイムエッジ）って何？」

振り向いたリンドウの目の前に少女は居た。
彼の腹と少女の胸がくっつきそうな程に近く。
リンドウは驚いたが、ソレを表に出さないぐらいの芸当はできた。
そして先程と同じ態度で少女の問いに答える。

「三爪炎痕（フレイムエッジ）ってのはな、嬢ちゃん。
簡単に言えばただの痕跡（サイン）さ」

「サイン？どんな？」

そう答える少女の顔には疑問と驚きの色が浮かんでいた。
リンドウは少女に構わず話を続ける。

「炎の爪で斬られた様な三角形の傷痕。」

「さんかっけい？ほのおの、つめ？」

リンドウの言葉は少女の顔に浮かんでいた疑問の色をより一層濃くした。
そして少女は頭を抱えその場に座り込んでしまう。
その顔には先程よりも、濃い疑問の色が浮かんでいるのだろう。

「わかんないなら嬢ちゃん、さっきお前さんが斬った化け物の傷跡を見りゃいい」

リンドウは頭をポリポリ掻く仕草をし、目でヘラの遺骸を示唆した。
少女はまだ疑問の色が色濃く残る顔を上げヘラを見る。

「あれが、『三爪炎痕（フレイムエッジ）』？」

「そう、アレだ。
んでな、俺らは『三爪炎痕(フレイムエッジ)』を探していた。
……ここまで言えばわかるか？嬢ちゃん。
いや、三爪炎痕(フレイムエッジ)って呼んだ方がいいか」

いつもの軽い口ぶり。
しかし、その眼光には微塵の油断も感じられないまま少女に問う。
その言葉を機に、少女の顔からは疑問の色が消え、代わりに警戒の色が濃くなった。

「……わたしを、どうする、つもりなの？」

リンドウと少女を包む空気が数度、下がった様に感じられたのは気のせいであろうか。
少女の気迫に気圧されたのかわからないがリンドウは黙っていた。

「まさか……あの男たちみたいに、私を捕まえて、縛って、ヤるつもり？」

この一言が空気をかえた。
少女の放った言葉にリンドウはくっくっく、と腹を抑えプルプルと震えながら笑っていた。
彼の行動が余程意外だったのか、少女の顔に再び疑問の色が浮かんだ。

「なにがおかしいの？」

リンドウはまだ腹を抑え、小刻みに震えながら笑っている。
わからないことに対する苛立ちかはわからないが、少女は少しだけ声を荒げる。

「なにがおかしい」

「あいや、笑って悪かった……すまんすまん」

リンドウは笑いを堪えながら、片手で腹を抑え片手をあげて謝る。
そして大きく息を吐き出した後、いつもの様な軽ーい口調で再び話始めた。

「嬢ちゃん、別に俺らはアンタとヤりたいからお前さんを探してた訳じゃないんだ。
ただ、ちょっとお話がしたいだけさ」

「はなし？」

「そうそう、お話。お話ぐらいならいいだろう？」

リンドウはいつもの人懐っこい子供の様な笑顔を少女へ向けた。
少女はその笑顔を向けられて気恥ずかしくなったのか微かに頬を赤らめると、ぼそりと呟くように答えた。

「話くらいなら……まぁ、いい……かな」

「よーし、そうと決まればサッサと行くぞ！」

リンドウはまるで「明日遊園地に行くぞ」と言われた瞬間の子供の様に笑うと少女の肩を掴み装甲車を指さす。リンドウの突然の挙動に驚いたのか少女は、「きゃっ」と年相応の可愛らしい声をあげ肩を一瞬竦め、リンドウの顔を見上げていた。

「ほーれ、さっさと行こうぜ？嬢ちゃん」

少しばかり戸惑う少女を見てリンドウが再び笑いかけると、更に少女の顔は赤くなる。
そこにはもう、先ほどの鬼女の様な雰囲気は消えた、ごくありふれたお年頃の普通の少女の姿があった。

「え？あ、ちょっ…」

戸惑いの声を上げ、後ろを振り返ったりするも少女はリンドウに押され、時には引っ張られながら装甲車へ連れて行かれる。

そして気が付けば少女はリンドウにされるがまま装甲車に乗せられていた。

第2話　少女の正体（後書き）

リンドウさんみたいなお兄さんいたら毎日楽しーだろうなって思ってきた今日この頃です。

第3話　勧誘（前書き）

今回はあのマッドサイエンティストとか言われてるアノ人の登場です
不自然なとこがあるかも知れないけど、ご容赦ください……

第3話　勧誘

「なぁ嬢ちゃん、ちっといいか？」

装甲車に揺られること３０分。
沈黙が気まずかったのかどうかは知らないが、リンドウは助手席に座る少女に話しかけた。

「なに？」

少女はリンドウの方を向かず、荒廃した景色を眺めながら答えた。
リンドウは前を見ながら少女に訊ねる。

「嬢ちゃんの名前、聞いてなかったからよ。聞こうと思って」

「人に名前を聞くときは、まず、自分から。じゃないの？」

少女は少々呆れ気味に言った。
『人に名前を聞くときはまず自分から』
まぁ、当たり前だ。
少女の言葉を聞きリンドウは一瞬バツの悪そうな表情をみせ、後頭部を掻く仕草をしながら答える。

「おっと、すまん。そーだったな……
俺は『雨宮　リンドウ』。雨宮が名字でリンドウが名前だ。」

「雨宮リンドウ、か……覚えた」

少女は呟くような声で何度かリンドウの名前を呼び、納得したように一人頷く。
その姿を横目で見たリンドウは、少しだけ口元を緩め無意識のうちに笑っていた。

「で、嬢ちゃんの名前は？」

「……アリス＝リデル」

自分の名前を言うのが恥ずかしいのか、リンドウの質問に答える少女（アリス）の声は少しばかり小さく感じられた。

「『アリス＝リデル』か、いい名前だな」

軽く笑いながらリンドウはアリスに言う。
アリスはまたもや頬を赤らめ気恥ずかしそうにしてそっぽを向いてしまった。
そしてやや下を向きながら、アリスはぼそりと呟くようにして一言。

「……と」

アリスが再びそっぽをを向き景色を眺め始める。
それから数十秒ほどたってから、リンドウは気が付いた。
アリスが“ありがと“と言った事に。

それからしばらく、二人の間に会話は発生しなかった。
リンドウは今ではすっかり貴重品となったタバコをふかし、アリスは荒廃した景色をそれなりに楽しんでいた。装甲車の走行音が軽快にリズムよく響きわたる。
そんな中、アリスは寝ていた。
装甲車の揺れが気持ちよかったのか、それとも先の戦いで疲れたのかはわからない。
リンドウはアリスの寝顔をみて、少しばかり口元を緩めていた。

「……リンドウ、ここどこ」

「フェンリル極東支部。通称アナグラ」

「どうして私たちは閉じ込められてるの？」

「さぁ？」

「……はぁ」

アリスは深いため息を吐き、下を向いて黙りこんでしまう。
リンドウはタバコを吸いながら虚空を見つめていた。

現在、私達は真っ白な部屋の中にいる。
下を向きうつむいていたアリスは、ふと思った。
タバコ臭い、と。
外に居た時は気になるほどでは無かったのだが、やや狭めの部屋で吸われると案外気になるものである。
アリスはそんなことを思いながら煙たそうにリンドウを睨んでいた。
まぁ、実際はただ目を細めてリンドウの事を見ていただけなのだが。
アリスがタバコの臭いに難色を示しているのに、リンドウは気が付いていない様だった。
終(つい)にアリスはしびれを切らし、不機嫌そうな声でぼやいた。

「煙い」

「何が？」

「タバコが煙い」

「ああ、悪い。すぐ消すわ」

そういってリンドウはすぐにタバコの火を消すと、吸いかけのソレを大事そうにケースにしまい、床に座るアリスの方へと向き直る。
アリスの顔には不満の色が色濃く出ていた。誰が見ても彼女が不機嫌だと一発でわかる程に。
ソレを見たリンドウは後頭部を掻く様な仕草をして、そっぽを向く。
何を話そうか、とリンドウが考えていると突然、部屋のドアが開かれ一人の男が入ってきた。

濁したような銀色の髪、肌は白く、白みのかかった茶色のローブのような服の下には和服の様なものを着ているようだ。
両手に手袋をはめ、眼鏡をかけているのに首からもう一つ老眼鏡のような眼鏡をたらし、開いているのか分からないぐらいの細眼の男。
アリスはこの男を見てキツネと言う動物を想像していた。

「やぁリンドウ君。ご苦労だったね」

男はリンドウの方を向きにっこりと笑っていた。
その男はリンドウと一言二言交わした後（のち）、私の方へ向き直った。

そして男はその顔を、顔と顔がくっつくのではないか？と思う程近づけてきた。
アリスは表情を変えず、じっと眼前の男を仏頂面に近い顔で睨む。
男も表情を崩さず、ジッとアリスを見た後（のち）、顔を上げにっこりと笑う。

「初めまして『三爪炎痕（フレイムエッジ）』君。
君が来るのを待っていたよ」

アリスは表情を崩さない。それは目の前の男も同じでその表情を崩さなかった。
二人は表情を変えることなく、お互いをのことを観（み）察ている。
先に口を開いたのは、アリスの方だった。

「貴男、だれ？」

アリスの問いに男は一瞬だけポカンとした表情を見せた。
そしてすぐに元の笑顔に戻るとアリスに目線を合わせる為に腰をかがめ、やや前のめりの姿勢で片手を伸ばし、握手を求めながら自己紹介を始める。

「ああ、すまない。自己紹介がまだだったね。
私は『ペイラー・榊』ここ、フェンリル極東支部技術開発の統括責任者を任されている者だ。では改めて、よろしく」

「私は『アリス＝リデル』。よろしく、ペイラー榊」

アリスは一切表所を変えず、機械の様な返答をして榊の手を握り替えす。
手を握り返された榊の顔にはほんの少し疑問の色を浮かんだ。
が、すぐにその色は消えて、もとの笑顔に戻っていた。
榊は上体を起こし、老眼鏡に似たメガネの位置を直し、再びアリスを見る。

「さてアリス君。君に聞きたいことがるんだけど、いいかな？」

「……構いませんが」

アリスはなんだろう？と言った表情を浮かべながら榊を見上げていた。
やや遠巻きにだがリンドウも、アリスに似た表情を浮かべながら榊を見ている。
榊は相変わらず笑っていた。
そして、次の瞬間――

「君、フェンリルに入らないかい？」

榊はとんでもないことを、まるで子供が昨日見たテレビ番組の結末を言うようにサラリと言ってのけた。数秒後、二人はやっと榊の言った言葉を理解する。

「「……は！？」」

その言葉を聞いたリンドウとアリスは全く同じリアクションを取っていた。
二人の反応をを見た榊は一段と嬉しそうに笑う。

「だから、フェンリルで働いてほしいって言ってるんだ♪」

呆気にとられて何も言えないアリスに変わり、口を開いたのはリンドウだった。
ポーカーフェイスの彼にしては珍しく、焦りと驚きの色が濃く出ている。
榊はリンドウとは違い、全く焦っておらず極めて冷静だった。
そして、今なお焦りの色を浮かべるリンドウをよそに彼は告げる。

「アリス君、君の正体は大体わかっている。
君が体がまっとうな人の身体ではないことも。
……そのうえで君にお願いしたい。フェンリルに、入ってくれるかな？」

榊の目は、リンドウが今まで見た事がないほど真剣だった。
アリスは榊を見たまま数秒程考え、口を開く。

「わたしは別にかまわない……
けれど、貴男にそんな権限があるの？」

リンドウには彼女の言葉の意味がわからなかったようだ。
榊は一瞬だけ驚いたような表情を見せ、今度は嬉しそうな笑みをその顔いっぱいに浮かべた。

「君はなかなか鋭いようだね。
ますます君に興味が湧いてきたよ」

「誰だってわかる。
あなたは確か、自身の事を『技術開発統括責任者』だと言っていた。
そんな立場であるあなたに、人の入隊を許可できるわけが無い。
違う？」

確認するような口調でアリスは榊に告げた。
彼女の発言を聞いたリンドウは納得したような表情を見せ、いつもの顔に戻る。
榊はというと、先程よりも嬉しそうに笑っていた。

「そのとおり！私にそんな権限はない。
でも……これなーんだ？」

嬉しそうに笑う榊の手に握られている物をみて、リンドウは驚愕の表情を浮かべる。
アリスにはそれがなんなのか、さっぱりわからなかったが紙面を呼んでいくうちに口が開いていた。榊が二人に見せた物。
それは、ここフェンリル極東支部に入るための入隊許可証。
リンドウは心底驚いた表情のまま呟くように言った。

「こりゃ驚いた…」

「だろう？
後はアリス君がここに捺印を押せば手続き完了さ」

榊はテストで１００点を取った子供の様に得意げに言う。
そんな彼を見てリンドウは苦笑いしながら頬を人差し指で掻いた。
榊はその顔に満面の笑みを浮かべながら朱肉を取り出し、書類と共にアリスへ突き出す。

「それじゃ、押してくれるかな？アリス君」

「え、ああ……はい」

アリスは少々戸惑いながら捺印を押した。
榊は捺印の押された書類を大事そうにしまうと、白い部屋から出て

行った。
二人が暫く呆けたまま白い部屋に居ると、榊が再び入ってきて二人を強引に連れ出し、足早にどこかへと向う。
道中アリスは何度も「何処へ向かっているの？」と榊に質問をしたが、質問するたびに榊はいたずらっ子のように「ヒ・ミ・ツ」といって教えてくれなかった。

第3話　勧誘（後書き）

感想お待ちしてまーす……

第４話　腕輪という名の首輪（前書き）

タイトルはけっこー適当だったりする。

第４話　腕輪という名の首輪

アリスは現在、薄暗い闇の中に居る。
先程まで共にいたリンドウと榊は現在、ここにはいない。
二人ともアリスをこの空間に連れてきた後、彼女を置いてどこかへと足早に去って行ってしまったのである。しかも、ロクな説明は一切無し。

（……退屈。）

彼女は如何にも退屈そうな表情を浮かべ、眠たそうに目元をこすると今度は口元を隠すように片手で覆い、一つ小さなあくびを欠いた。
直後、眩しすぎる程に強烈な光が薄暗い闇を全て駆逐する。
彼女はほんの少しだけ不快な表情を見せて目を細めると、すぐに元の人形のように冷めた表情に戻す。
そして、照らされたことにより全貌が明らかとなった空間に少しばかり驚いた。

退屈しながら待たされていた空間は、彼女の予想よりも遥かに広かった。
ちょっとしたスポーツや集会ぐらいなら余裕で行えるのだろう。
そこを囲う鋼鉄製の壁。
所々、削れていたり凹んでいたり穴が開いていて、コンテナの様な障害物があったりする。
きっとここは訓練場か何かなのだろう。
天井の高さもそれに見合う程に高く、目測ではあるが高層ビルの5階くらいはありそうだ。
そして高さ的にはビルの3階に相当する部分は一面ガラス張りになっていて、その奥にあるであろう部屋から3つの影がアリスを見下ろしていた。
3つの影の内、2つの影をアリスは知っている。
2つ影の内一方は、人懐っこい笑顔とタバコが特徴の『雨宮　リンドウ』。もう一方は細い切れ長の狐目が特徴の『ペイラー榊』。あと一人は逆光のせいか顔がよく見えず、大まかなシルエットしか見えなかった。
一体どんな人物なのだろうか、とアリスが思考を働かせていると天井のスピーカーから榊の声が響いた。

「長らく待たせてすまなかったね、アリス君。
暫く使っていなかったから準備に時間が掛っちゃって……
じゃあヨハン、後は任せたよ」

榊は踵を返し部屋の奥へと消え、かわりに現れたのはアリスの知らない人物。
先程はシルエットしかわからなかったが、前に進み出たことで良く見える様になった。

年は４０代中頃と言ったところだろうか。
様々な経験を刻み込んだかのような深い知性にあふれた端正な顔。
間違いなく美形の部類に入る顔だろう。純白のコートを見事に着こな堂々としたスタイルが際立って見えた。

「初めまして、『三爪炎痕（フレイムエッジ）』。いや、アリス＝リデルと言った方がいいか」

スピーカーから放たれたのは、ただの一声でその場にいる者達を掌握できそうな朗々たる美しい声。
きっと声の主は、演説することや、聴衆の心を引き付ける術にたけているのだろう。
彼の声に呼ばれた瞬間アリスもその姿勢を正したほどである。

「私は『ヨハネス・フォン・シックザール』
ここ、フェンリル極東支部の支部長を務めさせてもらっている者だ。
今日この日、君という至高の存在に巡り合えた幸運に、私は喜びを禁じ得ない」

支部長の声に引き付けられたのも一瞬の事、アリスの興味はすぐに別のモノに引かれていた。
所々傷んだ訓練場の中央に見える機械仕掛けのやや大きめの台座。

アリスの興味を引いた機械仕掛けの台座。

それは、神機使い適合候補者が神機に受け入れらるかどうかを調べる最終検査に使われる物。
その機械仕掛けの第座には通称『Ｐ５３アームドインプラント』と呼ばれる腕輪と、偽りの神々を屠る事の出来る唯一の武器（きば）である神機が置かれている……のだが、今回は腕輪のみが設置されていた。

それも、既存の腕輪とは違いやや小さめの腕輪であり、腕輪の最も大事な機能がソレにはない。
だが他の機能、例えば位置情報特定用のビーコン、ターミナルへの接続、身分証明、特定範囲内での通信機能などはちゃんと存在する。

話を戻すが、この小型化された腕輪には存在しない最も大事な機能。
それは神機使いの体内に存在する人為的に制御されたオラクル細胞、通称「Ｐ５３偏食因子」と呼ばれる細胞の制御、および神機に捕喰されることを防ぐため定期的に行う偏食因子の静脈注射。

何故この機能がこの腕輪には無いのか。
その理由は簡単である。

彼女が偏食因子を自ら生産、並びに制御する事が出来るから。

先程、榊が無断でアリスの血液を調べた結果、彼女自身の体にはオラクル細胞が存在していた。
いや、訂正しよう。
彼女の体内に存在していたのはオラクル細胞と非常に似た、全く別の細胞。
その細胞を軽く調べた結果、その細胞は既存のオラクル細胞よりも捕喰力・結合強度が段違いに高く、彼女の血液にオラクル細胞を混

入した結果、とんでもないことが起きた。
浸喰する側であるはずのオラクル細胞が、逆に浸喰され紫炎を吹き死滅していたのである。
彼女の細胞については解析中の為、これ以上はなにも言えない。

「アリス君、心の準備が出来たらその機械の前に立ってくれ」

アリスは臆することもなく中央の腕輪接続機（しょけいだい）に歩み寄りソレを観察する。
丁度、手首を置くところに半円形の形状をした物体が台座の上にはめられていた。
それはボルトを止める際に使うナットを半分に割ったような形状で、血の様に美しくどこか忌々しい紅に彩られている。
少し見上げると台座の上部には、それと対を成す似たような部品が組み込まれていた。

「では、機械に腕を入れたまえ。」

スピーカーから聞こえてきたヨハネスの声に意識を戻され、思考を破棄して目の前の事柄に集中する。
そしてアリスは半分に割られたナット――
「P53アームドインプラント」の片割れの上に手首を置く。
執行猶予時間を過ぎ、首切り台のギロチンが罪人の首を刎ねるようにして腕輪接続（しょけいだい）機の上部の台座が落ちた。

上下に設置された腕輪が噛みあい、アリスのか細い腕を挟み込む。
痛みや不快感は全くなく、気が付けば腕輪装着機は開き、アリスが腕を入れる前の状態に戻っていた。

「……邪魔」

アリスは右腕に取り付けられた腕輪を観ながらわざと聞こえる様に呟く。
その顔は如何にも不満たっぷり、と言ったものになっていて少しばかり頬が膨らんでいた。
そんな彼女を見たヨハネスは、

「その腕輪は一生取れない様になっていのでね、多少不便かもしれないが我慢してくれ」

アリスはシックザールの声になど耳を傾けず自分に付けられた小型化した腕輪をじっと見つめる。
そして一言、息を吐くようにして呟く。

「この腕輪という名の首輪……やっぱり、邪魔」

聞こえるかどうかすら怪しげな程、ちいさな声で呟く彼女の顔は少し曇っていた。
しかし、誰もそれに気づくことはなかった。
こうして三爪炎痕（フレイムエッジ）こと、アリス＝リデルは正式にフェンリルの狗（いぬ）となった。

不意に、天井のスピーカーから声が響く。

「アリス君、ちょっとだけデータを取らせてくれるかな？」
スピーカーの声の主は先程部屋の奥へと消えた榊だった。
アリスは訝しげに榊の方を向き、きっぱりと言う。
「注射の類なら断る」
「注射の類じゃないよ。ただ、戦ってもらうだけさ。
それならいいだろう？」
「まぁ、それならいいけど……」
「じゃ、存分にやってくれてかまわないからね」
「……！」

アリスが何かの気配を感じた直後、目の前に訓練場の地面から黒光りする液体金属の様な、人口生命体が現れた。
そこに居たのは鈍色の獣。
特徴的な首の後ろから生える幾枚の花弁のような体皮。
まるでそれは百獣の王のみが身に着けることを許された外套（マント）。
そしてアリスへと向けられる狩人（けもの）の瞳。
最強の野獣たる虎の様な頭部。その頭の上半分は硬化し、鬣（たてがみ）にも鎧兜にも見えた。
そう、それは雷獣神『ヴァジュラ』を模した人工生命体。
俗にいう「訓練用模擬アラガミ」と呼ばれる代物だった。
訓練用と言っても動きや攻撃方法は本物となんら変わりは無く、油

断すれば一発だ。

ダミーヴァジュラがアリスを捕える。
そして、鈍色の外皮(マント)を広げ戦いの始まりを告げる咆哮(あいず)をあげた。

「……一つ二つ三つでまた明日」

訓練場に独特の律に乗せられた言葉が響く。
気が付けばダミーヴァジュラはその身に三爪の傷跡を刻まれ地に伏し、二度と動くことはなかった。
アリスはダミーヴァジュラの体液のついた漆黒の刀を振い、体液を拭っている最中で、その顔はどこか楽しげである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7184z/

GODEATER　～三爪炎痕の記録～

2012年1月11日00時59分発行